

## [17] Crossover

<https://doi.org/10.15017/19353>

---

出版情報 : Crossover. 17, pp.1-29, 2004-07. 九州大学大学院比較社会文化学府  
バージョン :  
権利関係 :

# 文系と理系のはざまで恐竜を研究する？

江 田 真 毅

私はこれまで文系と理系を行ったり来たりしながら、持ち前の運のよさを生かして、自分のやりたいことを(結果的に)追いかけてきました。高校生のころは、大学で恐竜の勉強をしたいと思っていました。当時私は、「古いものを考える学問という考古学は、恐竜のように古いものを考える学問であろう」と信じていました。そして、「古代の動物に興味があります」と高らかに宣言して、大学の人文系の学部到自己推薦で入ってしまいました。首尾よく大学に入った私は、クラス主任の先生(専門は考古学でした)に、「どうしたら恐竜の勉強ができますか?」と何の臆面もなく相談しました。そのときの先生の「何でこんな子がいるんだ?」と書いてあった顔は今でも忘れられません。皆さんお分かりのように(?)、考古学では恐竜について勉強できませんでした。

大きな間違いを犯して入ってしまった考古学の研究室。しかし、さまざまな遺跡の発掘に参加するうちに、非常に面白い資料に出会えました。それは、遺跡から出土する鳥類の骨でした。特に、当時大学で発掘していた北海道の礼文島の遺跡からは、大量のアホウドリ科の骨が出土していました。卒業論文では、その遺跡から出土した鳥類の骨を分析し、「そこからどんな人間の生活が復原できるか?」をテーマとしました。鳥類の骨から人間の生活を復原する場合、鳥類の生態を学ぶ必要があります。例えば、「この種は冬に遺跡周辺に渡来するから、この種の骨が出土している遺跡は、冬季にも利用されたに違いない」などといった推定に利用するためです。これらの推定は、現在の鳥類の生態が過去にも同じであったことを前提とします。しかし、本当にこの前提は正しいのでしょうか?私はこの点に大きな疑問を持ちました。例えば、私が興味をもったアホウドリ科の鳥は、礼文島の周辺に現在まったく生息していません。「アホウドリ科のように生息域が変わった鳥類は、他にもいるのではないか?」などの疑問を生物学の視点から考えるために、大学院は農学系の研究室に進学しました。

入学当初、生物学の研究室は厳しいものでした。「何となくこんなことがやりたい」というだけで具体性に乏しかった私の研究は、方法上、そして研究の意義でも、何度も暗礁に乗り上げました。特に、骨の計測値を利用して、遺跡から出土する骨

の種単位での同定を目指した(一般に、遺跡出土の鳥類骨は同定が困難なため、科単位で同定されてきました)修士論文は、提出後に大きな欠陥がみつきり、遺跡試料を正しく同定できないことが分かりました。

「せめて遺跡から出土するアホウドリ科の骨だけでも種単位で同定して、どの種が生息域を狭めたのかを知りたい!そのためには遺跡試料のDNA解析が必要だ!」と訴えた私に、指導教官の先生は、当研究院生物多様性講座の小池裕子先生を紹介してくださいました。小



池先生は私を暖かく迎えてくださり、他大学の学生であるにもかかわらず、研究室を利用させてくださいました。その後、先生方のお力添えに支えられて、遺跡から出土するアホウドリ科の骨はほとんどがアホウドリという一種のものであること、また、現在は世界中に約1,500羽しかいないこの種の保全を考えるうえで遺跡試料が非常に重要であること、などを明らかにすることができました。さらに、昨年度にはこのテーマで博士論文をまとめることもできました。

今年度からは、「古代DNAを用いた鳥類遺体の研究—人類が過去の鳥類に及ぼした絶滅・繁栄などの解明」をテーマに、日本学術振興会の人文・社会系の特別研究員として当研究院にお世話になることになりました。遺跡試料のDNA解析を通じて、人類とさまざまな鳥類とのかかわりの歴史を明らかにしていきたいと考えています。最後に一つ。近年、形態上は明らかに恐竜の仲間でありながら、羽毛をもった動物の化石の発見が相次ぎ、鳥類が恐竜の子孫であることがより確実になってきています。「鳥類を研究の対象とするということは、恐竜を研究の対象とすることとほぼ同じなのではないか?」と考えている今日この頃です。

# 東北アジアの鋳型研究

田 尻 義 了



本年度から、日本学術振興会特別研究員(PD)に採用されました。昨年度までは、比較社会文化研究学府博士後期課程に在籍していました。比較社会文化学府とは、これまで修士課程・博士課程併せて5年間お世話になっており、今後さらに3年間お世話になります。専攻は考古学で、専門分野は弥生時代の青銅器に関する研究を行っています。なかでも特に東アジアの視点から、製作技術の比較検討とその位置づけを行っています。

九州大学が所在する北部九州は、その地理的環境から朝鮮半島との関係が古来より緊密な地域です。日本の歴史の中で、弥生時代はその朝鮮半島から数多くの文物・文化・情報をもたらされた時代です。また、弥生時代はご存知の通り、青銅器に代表される金属器が日本列島に導入された時代に相当します。

私が研究の対象としている弥生時代の青銅器とは、そうした当時の社会を代表する遺物です。ただ、これまでの研究の多くは、青銅器自身の研究を中心として進められてきました。考古学は物質文化を対象にする学問ですから、遺物としての青銅器そのものを研究対象にしてきたことに充分肯くことが

出来ます。しかし、私はその青銅器がいかんにして作られたのかという製作技術に関心を持っています。青銅器の製作した技術を、研究対象に含めることによって、これまでの遺物の研究からだけでは分からなかった新たな知見を得ることが出来ます。

製作技術は、青銅器そのものの調査によって想定できることもあります。主な対象は鋳型です。弥生時代の青銅器を製作するための鋳型は、これまで北部九州を中心に約250点ほど発見されています。鋳型の調査によって、製作技術の復元をある程度まで行うことができます。したがって、製作技術の研究には、青銅器自身と鋳型という2つの方向性から進める必要があります。

北部九州から出土する鋳型は石製で、ある特定の石材(石英長石斑岩)で製作されています。石材は判明しているのですが、産地が未だ不明です。

私の研究でも石材をどこから入手したのかという点が分からず、保留している状態です。地道に山歩きをするほか無いのかもしれない。

朝鮮半島から伝来した青銅器ですが、製作技術を比較すると、朝鮮半島と日本列島では若干異なるようです。鋳型の石材が両地域で共通しておらず、また、朝鮮半島から出土する全ての製品が、日本列島において出土するわけではありません。両地域の青銅器製作技術の比較研究は、弥生時代の日韓交渉の具体的な様相を示す一側面になります。また、朝鮮半島の青銅器は、中国東北部からの影響を受けて成立しています。製作技術も中国東北部からの影響を受けています。

今後、弥生時代の青銅器製作技術を中国東北部まで含めた東北アジア地域のなかで、どのような位置を占めることになるのかという研究を行っていきたくと考えています。まだまだ、研究の途上ですが、皆様宜しく申し上げます。

## 私の地道な研究

石川京子



1992年に九州大学に入学し、1年半を六本松で過ごした後、箱崎へ進学、学部卒業後に六本松の大学院へ戻って、早7年。この3月に博士課程を単位取得退学し、今年の4月から九州大学大学院21世紀COEプログラム(人文科学)の学術研究員になりました。大学1年の頃には、地下鉄の六本松駅の完成間近までこの大学に居座ることになろうとは思いませんでした。専門は、考古学で、古人骨を扱った研究を行っています。現在行っている研究テーマは、日本先史時代の抜歯風習の研究です。儀礼的に歯(健康な歯)を抜くという抜歯風習は世界各地で見られます。日本列島でも一部の地域では現代までこの風習が残っていましたが、この風習は縄文・弥生時代に非常に盛ん

に行われていました。古人骨に見られる抜歯を観察することにより、どのような儀礼でわざわざ健康な歯を抜いているのか? 抜く歯の種類に何か意味はあるのか? 社会が変わると抜歯風習はどう変わるのか? 韓国や中国大陸・台湾の抜歯風習との関係は? という点を明らかにし、抜歯風習という1つの儀礼が先史社会において果たしてきた役割について議論を行います。

この研究は、大部分が既に発掘・整理された様々な研究機関に所蔵されている古人骨資料の観察を元に行っており、実際に日本や韓国で発掘調査・整理作業に参加させて頂いた古人骨資料は、研究資料のほんの一部です。「考古学」というと、「発掘」=「新発見」という印象を持たれる方も多いようですが、他の学問分野と同じで、地道な発掘・データ収集・分析の積み重ねが必要です。私の場合も、とにかく古人骨の発掘に参加させてもらうこと、とにかく古人骨をたくさん観察すること、様々な分析の試行錯誤、により初めて今の研究の基礎が成り立っています。

以上のように、地道な発掘・資料整理・観察・分析に基づいた研究を行い、先史時代抜歯風習に関して博士論文を執筆中です。どうぞよろしくお願い致します。

## イニシエーション / 懺悔

宮下尚子



このたびCOE(人文科学)の学術研究員として採用されました比較社会文化研究科の宮下尚子と申します。自己紹介をとのことですが、confession(懺悔)を以ってこれに替えることをお許しください。

年内に博士論文を完成させ、かつ論文生産に励むというごくごく厳しい条件つきで採用していただきました。このため、学内に自分の研究室をいただき、とは言っても他の研究員の方々と共用の部屋ですが、院生の間はプレハブでできた院棟の中

にさえ机を持つことができなかつたので、身に余る幸せです。この環境に日々感謝しつつ、研究活動に励む所存です。

専門は言語学です。言語学といっても様々な研究領域が存在するので、その中のどれが自分の専門、というふうには一口には言いがたいですが、歴史言語学や言語の変化といったことに関心があります。現在の研究テーマは中国延辺地区における漢語と朝鮮語の言語接触です。中国朝鮮族の朝鮮語が、中国という制度の下でどのような変容を遂げつつあるかということ、音声、文法、語彙等の諸領域にまたがって記述し、中国朝鮮語の特殊性の中にある漢語の影響を、言語接触理論として一般化できるように記述しようというものです。テーマは随分と大きなものですが、思い返せば、修士課程は独文学専攻言語学専攻科というところに属していたため、朝鮮語はと

もかくとして、中国語の心得は皆無に等しく、本学の博士課程に編入するに際し、世話人教官となつていただいたの岩佐先生から中国語をきちんと勉強することを前提に進学を許していただいたような次第です。中国語のおかげで、自分の研究領域が広がり、深みを持つことができたのではないかと自負しています。何故なら、例えば朝鮮語であればハングル創設以前の朝鮮の文献は全て漢字を使って記述されているので、中国語が読めるか読めないかで扱う文献の量に格段の差が出てきます。ただ、朝鮮語の傍層として漢語の他にもモンゴル語、満州語などさまざまな言語が痕跡を残しているので、やはりもう一歩踏み込んで、これらの言語についても文献が読める程度にはなりたいというのがこれからの研究の広がりをも視野に入れた課題の一つです。

## 自己紹介

松尾 晋一

専攻は日本近世史、そのなかでも17世紀～18世紀にかけての幕府の対外政策（海防）における幕藩関係の推移について研究しています。最近、特に「海賊」行為に対する幕府と大名の対応に注目し、それが中世段階における「海賊」への対応を継承したものなのか検討しています。こういった研究テーマということもあり、比文在学中にはCOEでの調査にも同行させていただく機会等に恵まれました。海外機関所蔵日本関係資料の閲覧等もできたと同時に、他分野の先生との意見交換もでき、研究者を目指す者として視野を広げる貴重な経験を積ませていただきました。将来自分の研究人生を振り返るときに、偶然にも九大のCOEが採用されている段階に院生として在学できたことを、一つの転機だったとおそらく感じるかと思います。

さて、この四月より幸いにも学術研究員として採用していただきました。応募の際に計画書を提出いたしましたが、限られた時間の中でどれだけの成果を出せるか、この点は未知数

です。ただ、焦ることなくマイペースを心懸け、理想と現実が懸け離れないだけの研究成果は出していく所存です。従いまして、比文在学時以来お世話になっている先生方をはじめ、他のCOE関係者の方々、どうか暖かく見守っていただきたく存じます。今後とも宜しくお願いいたします。



第二次世界大戦で被害を受けず、古い町並みを残している地域であるデルフスハーフェンにて（ロッテルダム）。

## 感謝！

今村佳子

(日本社会文化専攻)

はじめに、博士論文の執筆にあたり、厳しくかつ温かくご指導くださった宮本一夫先生、田中良之先生、森川哲雄先生、溝口孝司先生、岩永省三先生に心より御礼申し上げます。

振り返ってみると、1997年4月に比較社会文化研究科(現、学府)博士後期課程に入学してから博士論文を提出するまでに、7年あまりの月日が経っている。思えば、あっという間の7年であった。今の私があるのは、言うまでもなく、自分自身だけの努力ではない。

在学中は、先生方のご指導はもちろんのこと、学友との研究上の議論を交わし、また授業のない日は福岡市などの教育委員会で発掘調査や整理作業に関わらせていただき、考古学三昧の充実した日々を過ごしていた。

私の専門は中国考古学のため、中国各地の考古研究所や博物館、文物管理処、あるいは遺跡をめぐる、実際に考古資料を観察したり、遺跡を踏査して立地環境をみたりすることは研究する上で不可欠なことである。さらに、遺物や遺跡を見て回るだけでなく、専門に研究している大学の先生や発掘調査担当者の意見を聞くことも重要である。かねてから、中国にまとまった期間滞在して、報告書の記載だけでは捉えられない情報を収集しなければならないと感じていた。そして、ある程度長期間滞在することで、語学力を向上させ、さらに実際に生活してみなければ分かりえない、中国の風土・中国人の気風を少しでも知ることができるのではないかということもねらっていた。



ごちそう(中国にて)

中国政府奨学金を得ることができた私は、1999年9月から2000年7月にかけて山東大学歴史文化学院考古学系に留学した。留学中は考古学系の先生方には大変お世話になったが、特に樂豊実先生には公私にわたってもったいないほどのお気遣いをいただき、お陰様で、有意義な留学生活を送ることができた。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

樂豊実先生は、週一回は留学生を集めて(といっても2人だったが)ご自宅で授業を開いてくださった。また、近くの発掘調査現場で重要な発見があると必ず連れて行ってくださったり、研究上の相談にも真摯に応じてくださったりした。さらに、お忙しい中、先生には中国各地の研究機関や研究者宛の紹介状をいくつも書いていただいた。私はその紹介状を握り締めて、時間とお金の許す限り中国各地を旅して回ったものである。そして、山東大学がアメリカのシカゴ自然歴史博物館とエー



学生として参加した両城鎮遺跡発掘現場(中国・山東省にて)

ル大学とで共同で行っていた学術発掘調査に、山東大学学生として加えさせていただいて、一区画の発掘を任せていただいたりもした。先生はこちらの拙い中国語に辛抱強く耳を傾けくださり、様々なわがまを聞いてくださったわけなのであるが、今思えば私はなんともあつかましい留学生であった。

そんな先生のご好意のもとに、1年弱という短い間ではあったが、内容の濃い留学生活を送ることができた。留学生の中で心に強い印象を残していることは、発掘調査に参加したこと、調査旅行で見聞したことはもちろんのことであるが、何といつても知り合った人々とのさまざまな交流の思い出であろう。

## ○○○ 論文を書き終えて

山東大学の先生方や学生が、私たち留学生に手料理を振舞ってくれたことはしばしばで、農村にある実家に招待されて春節(中国の旧正月)を過ごしたこともある。各地の研究機関の方には、多忙な中で学生ごときに車を出していただいて駅への送迎や遺跡案内をしてくださったり、手ごろな宿や食堂を親切に紹介してくださったり、記念品や書籍を分けてくださったり、そして今でも何かの折に顔を合わせることがあれば気さくに話しかけてくださったりする方が多い。

さて、留学を終えて半年後、私は大学院博士後期課程を単位取得退学し、2001年4月美術館に就職することができた。学芸員として、展覧会の企画・準備・運営、教育普及事業(子供向け土器作り体験、市民講座など)、収蔵品の収集・整理・調査などにあたっている。このうち展覧会事業は主要な業務であり、最も心血を注いでいると言えよう。私どもの館では、収蔵品による平常展示の他、年に5~6本の特別展示を行っており、私には年に少なくとも1つは特別展の担当が回ってくる。当然のことながら、自分の専門分野でなくとも、担当になればどのようなテーマの展覧会でもこなさなければならない。そのため、その度に一から猛勉強が必要である。たいへんではあるが、勉強不足の私にはいい機会であり、ありがたくもある。

また、特別展のうち毎年1~2本は中国文物の展示があり、実は役得の多い仕事でもある。例えば、展示交渉などで中国に行く機会が多く、常に一級の文物に触れることができる。一方、留学中に培った人脈によって、お陰様で展示交渉が順調に進むこともあり、留学経験が仕事に活かせるというやりがいもある。就職後は発掘調査現場に出て汗をかくことがなくなったことが不満といえれば不満であるが、美術館や博物館の裏事情、展覧会の裏側を知ることができたこと、考古学以外の研究者と知り合う機会が増えたことなど、学生の頃までとは違い、めったにできない経験をしている自分の幸運を痛感しているところである。そうして、先輩学芸員の助けを得ながら、夢中で仕事をすするうちに3年が過ぎた。学位論文は、こうした職場環境の中で執筆したものである。正確には、博士論文の執筆は、構

想を立て始めた時から含めると博士後期課程入学からということになるが、留学によって見方が変わったところも多く、大半は留学後に進んだと言ってもよい。そういうわけで、博士論文には、結局のところ7年もかかることとなってしまった。

学位論文は「中国新石器時代の地域社会と精神生活に関する研究」という題目で、中国の黄河・長江両大河を中心とする広大な地域を対象として、新石器時代の社会の一樣相を捉えようとするものである。論文は、仕事を抱えながら書いていたせいもあったが、なにより自身の怠惰な性格が災いして、分析や考察が不十分なまま期限が迫り、結局、後悔の残る仕上がりになってしまった。後悔の残るなどと言うと、真摯にご指導ご審査いただいた先生方には、たいへん失礼な話である。誠に申し訳ありません。しかし、そんな悔いがあるとはいえ、一つの論文を仕上げたことで得たものは大きかった。この論文によって、自分の未熟さを知り研究をさらに深めたいという欲求が湧き、また先生方に貴重なご意見を数多く賜ったことで、研究の方向性を深く考えるまたとない機会となり、かえって何ものにも替えがたい経験ができたと言える。

この7年間には、留学や就職といったいくつかの人生の転機があったが、最も印象深いことが博士論文の提出である。研究の内容上の問題だけでなく、研究者としての心得について、非常に学ぶところが多かった。また、この7年間で痛感したことは、様々な人の支えがあって、今の自分があることである。先生方のきめ細やかなご指導、学生時代や留学中、また仕事上の出会いや経験があって、ようやく博士論文を提出することができたと思っている。博士論文を執筆している私を、温かい目で見守ってくださった職場の上司や同僚にも、この場を借りて御礼申し上げたい。自分の研究に対してまだまだ自信满满とはいかず、学位の取得に気後れを感じることもある。しかし、学恩に報いるためにも、学位を取得した今を研究者としてのスタート地点と位置づけて、気分を新たに邁進する決意を固めたのである。

# 比較社会文化学府での三年間を振り返って

塚本 礼 仁

(日本社会文化専攻)

世の中には実に様々な「マニア」がいるものですが、私は友人に「そら遠距離通学マニアばい(熊本弁)」とからかわれ続けています。高校三年間はアップ・ダウンの激しい片道12kmを40分ほどかけて自転車で通いましたし、熊本大学時代八年間(学部→修士課程→助手として勤務)は原付・JR・バス・徒歩を駆使しても片道1時間半くらいかかっていました。そして三年前の春、博士学位の取得を目指し九州大学大学院比較社会文化学府に編入学したのですが、お気づきの通りその距離も時間もさらにのびまして、片道2時間以上かけて通学しました。日常生活の中で福岡の街に出てくることなど全くなかったため、入学したての頃の私は天神の雑踏に圧倒されっぱなしでした。また、自宅が福岡県南端の大牟田市なので始発駅:大牟田→終着駅:福岡天神まで西鉄電車を利用するのですが、ダイヤを覚え、駅ホームでの「ポジション取り」のコツをつかむまでは、大牟田→福岡間を立ちっぱなしというのもしばしばありました。しかし、明確な目標を持って、ひきつづきアカデミックな世界に身をおけることが嬉しかったのを覚えています。

その三年前の入学式の日、新入生と先生方の懇親会に参加した私は、後日も忘れられない言葉を聞くこととなりました。

「大学院では1日遊んだらそれだけ学力が低下します」

「今日のような晴れの日にまでそんなこと言わなくてもいいのに…」心の中では率直にそう感じました。ところが、この言葉が私の比較社会文化学府での院生生活を時には充実させ、また時には苦難に満ちたものにしたキーワードだったのです。もちろんこの三年間は、少しの息抜きはしつつも、遊んで過ごしてはいません(本当です)。詳しくは後述しますが、統計資料があまり整備されていないものを研究の題材としていたため、現場に何度も入ったり独自のコネクションを広げたりして自分でデータを作らなければならず、実際に遊んでいる暇はありませんでした。ただ、学位論文を書き進めていく中で自分の理論やアイデアに対する自信が揺らいでしまった時、遊んでいないのになぜか上記の言葉が頭に張り付いてなかなか離れなかったものでした。そうなると、仕事は進まないが時間はどんどん過ぎるという、論文執筆中の院生にとってはまさに地獄のような日々が続きます。ベテランの先生方には「まだまだ

甘いなあ」と言われてしまいそうですが、正直な話、身体にも心にも毒です。

このように、決して順調とはいえないプロセスを経て「水産物フードシステムの構造変動と水産養殖産地の存続機構に関する研究」という学位論文を提出し、何とか公開審査もクリアして、2004年3月に博士(比較社会文化)の学位を取得することができました。終始ご指導を賜り、激励して下さった九州大学大学院比較社会文化学府の宮川泰夫先生・山下潤先生・佐藤廉也先生、貴重なご意見をいただいた熊本大学大学院社会文化科学研究科の山中進先生・愛知教育大学の伊藤貴啓先生・比較社会文化学府日本社会文化専攻地域構造講座宮川ゼミの同僚の皆様、事務手続きなどで大変お世話になった大学院係の方々には、心から感謝申し上げます。また、かなりマイナス思考でストレスや焦りでピリピリしていた私を温かく見守ってくれた家族・友人にも、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

さて、この学位論文には二つの柱があります。タイトルからも分かるように、ひとつはフードシステム(Food System)研究でもうひとつは産地研究です。そしてこれら二つが共有する題材、すなわち分析対象とした水産物は「ウナギ」です。世界最大のウナギ・マーケットである日本では、2002年現在で年間15万トン以上のウナギが食べられています。ただし、高度成長期以降に食されてきたウナギのほぼ全量は国内外で養殖されたもので、今日では国内消費量の約80%が輸入された中国製加工ウナギとなっています。学位論文では、こうした水産物(ウナギ)の「食」をめぐる社会経済的状況がどのようにしてできあがったのか、その過程で国内の養殖ウナギ産地はどのような仕組みで変貌し存続してきたか、さらに、国内産地の今後の持続可能性を強化する鍵はどこにあるかという点を明らかにすることに全力をつぎ込みました。

まず、フードシステムに関する研究は、私が専門とする第一次産業系の地理学界では1980年代のヨーロッパ(イギリス、フランス)で注目され、1990年代以降になって日本国内でも理論的検討や実証研究が増えてきました。今日の食料問題は、従来の食≒農水産業という枠組みで読み解くことが難しく、農水産業+食品産業→食という流れと制度・政策、貿易、技術革



## ○○○ 論文を書き終えて

新などが関連して動くシステムの分析が必要となっています。この新たな研究領域に手を伸ばそうとしていた私にとって、修士論文「日本における養鰻産地の再編過程に関する一考察」でも扱ったウナギという水産物はまさに格好の材料でした。しかし、ウナギという魚は、水産業界の中でもとりわけ「農水産業+食品産業 → 食」の流れにブラックボックスが多く、私の用途に応じた統計もほとんどないので、養殖原料調達・生産・加工・流通・小売・消費の各段階のデータ収集に時間と体力、そしてお金をかなり使いました。一度調査を行うと、しばらく経済的に辛い日々が続くというわけです。つぎに、養殖ウナギ産地に関する研究では、養殖業者だけでなく流通業者、加工場、餌飼料メーカーからも情報をあつめ、これらの連結構造を論文中で再現することに努めました。つまり、調査で現場の核心部分に切り込むことにより、修士論文からの発展はもちろん「産地研究」としての深化を図ったのです。このような意図を持って静岡県の浜名湖沿岸、愛知県の一色、地元福岡県の柳川、熊本県の有明海沿岸、宮崎県の一ツ瀬川下流、鹿児島県の大隅地区と色々な養殖ウナギ産地を歩き回りました(写真参照)。現地調査を重ねていくにつれて、「聞き取りで訪れた養殖業者宅になし崩し的に宿泊する」という得意技も身に付き、夜と一緒に酒を飲みながらさらに業界裏話を聞くということもできました。私としては業界裏話の方が研究上重要であることが度々ありましたが、この類のデータは残念ながら数が集まりません。客観性に欠けるため、泣く泣く脚注扱いにせざるを得なかったものも多いです。

ここまで思い返してみると、比較社会文化学府での三年間は、学位論文を完成させるために国内外のウナギ業界とひたすら睨めっこして過ぎていったような気がします。学部時代からずっと地理学をやってきましたが、「データは足で集める」・「困

ったら現場に行ってヒントをつかむ」という基本的な研究方法を最も一生懸命に実行した期間でした。冒頭でマニアのことを書きました。学位論文を完成させるという仕事には、その道のマニアになるという一面があると思いますが、学位を取得して大学院を修了した今、自分自身に念を押しておきたいことを最後に書いて終わりにしたいと思います。

ただマニアックなだけのウナギ論文はもう書けませんよ!



鹿児島県大隅地区のウナギ養殖場での給餌風景



静岡県「浜名湖養魚漁協」のウナギ加工ライン  
(蒲焼→急速冷凍へ)

平成15年度 課程博士一覧

学位記番号	博士の専攻分野の名称	氏名	専攻	博士論文名
比文博甲第51号	比較社会文化	コヤマ ケイコ 小山 啓子	国際社会文化専攻	16世紀フランスにおける王権と都市社会 —都市リヨンを中心として—
比文博甲第52号	比較社会文化	ミウラ マサヒコ 三浦 雅彦	日本社会文化専攻	一七世紀徳川思想史の再構成 —仏教をめぐる方法と対象の一考察—
比文博甲第53号	比較社会文化	イケダ リュウスケ 池田 隆介	日本社会文化専攻	日本語を使用した留学生の理解促進技術の開発研究 —アカデミックな接触場面の問題解決に向けて—
比文博甲第54号	比較社会文化	オカムラ トオル 岡村 徹	日本社会文化専攻	ナウル島の接触言語について —接触言語の安定度を決める要因—
比文博甲第55号	理学	エント キョウコ 圓戸 恭子	国際社会文化専攻	Studies on the Natural History of <i>Cylindrocaulus patalis</i> (Coleoptera:Passalidae) ツノクロツヤムシ(甲虫目,クロツヤムシ科)の自然史に関する研究
比文博甲第56号	理学	オダギリケンイチ 小田切顕一	国際社会文化専攻	Molecular phylogeography of the silvicolous hairstreaks, <i>Favonius</i> and <i>Japonica</i> (Lepidoptera: Lycaenidae) from East Asia 東アジアの森林性ミドリシジミ類,オオミドリシジミ属およびアカシジミ属(鱗翅目:シジミチョウ科)の分子系統地理
比文博甲第56号	比較社会文化	ツカモト レイジ 塚本 礼仁	日本社会文化専攻	水産物フードシステムの構造変動と水産養殖産地の存続機構に関する研究—日本のウナギ養殖産地を中心として—

学位記番号	博士の専攻分野の名称	氏名	現職	博士論文名
比文博乙第6号	比較社会文化	イチノセトシヤ 一ノ瀬俊也	国立歴史民俗博物館助手	近代日本の徴兵制度と社会

平成15年度 修士論文題目一覧

日本社会文化専攻

氏名	博士論文題目
ハマダ オビヒロ 濱田 帯広	「海外におけるノンネイティブ日本語教師支援の現状と課題 ータイ地方都市における中等機関タイ人教師支援活動を通してー」
アオキ チエ 青木 智恵	『学部留学生を対象にした学習リソース利用に関する実態調査 ー留学生支援制度の再検討を目指してー』
イケウチ カズキ 池内 一樹	「パラサイト・シングル」が構築した「現実」 ー「近代家族」への回帰と自己帰責化ー
イケザワ メイコ 池澤 明子	イミューディアット・アプローチによる日本語教育の方法研究
イタクラ ユウダイ 板倉 有大	九州縄文時代における定住化過程の研究
イデ レイナ 井手 玲奈	電話でのあいづち使用の実態 ーシンガポール人日本語学習者を対象にー
イトウ カズヒロ 伊東 和博	都市部における住民の水防災意識の現状と洪水ハザードマップによる 意識変化に関する研究
ウメザキ カズヒロ 梅崎 和裕	哺乳類におけるホメオボックス遺伝子の系統進化
オ ミンキョン 呉 珉庚	〈1947年～2000年までの大衆雑誌の記事に現れた「結婚」、「独身」観の変化〉 ー雑誌記事の題名の数量分析を中心にー
オウ シュクテイ 王 淑貞	現代日本語「も」の意味・機能の派生に関する研究
オオヤマ トモミ 大山 智美	戦国大名島津氏の領域支配ー九州経略における「幕下」支配を中心にー
キム ソヒョン 金 瑞賢	韓国人学習者の待遇と恩恵の表現に関する認識
キム ソンヨン 金 成妍	〈教化〉と〈解放〉の朝鮮児童文学 ー巖谷小波の招聘と朝鮮の少年運動を通してー
クワハタ ヨウイチロウ 桑畑 洋一郎	ハンセン病者の生活実践:生活をつくる行為主体としてのハンセン病者 ー沖縄愛楽園を事例としてー
シツ カズホ 實 一穂	カール・ハウスホーファーの地政学ー日本研究の意義と限界ー
ジョ リ 徐 莉	アスペクト表現の「～ている」に関する習得研究 ー中・上級の中国人日本語学習者の場合
スシモト タカシ 鮎本 高志	明治建軍期における「壮兵」に関する一考察 ー廃藩から西南戦争へ至る「国民軍隊」形成の一過程ー
チョウ シャンニン 邱 香凝	ハーリーツー 哈日族再考ー台湾における日本ポピュラー音楽の変容に対する考察
トーンディノック スカンヤー	タイ人学習者向け初級聴解教材開発のための基礎研究
バウ トウカ 朴 東花	日本における中国語メディアに関する考察
フカイ ナエ 福井 令恵	「分断」から「和解」へ?北アイルランド紛争(跡)地ツアーにみる新たな空間の想像
ホウ コン 彭 崑	新聞に使われているインターネット外来語の使用実態と理解について
ムラノ マサカゲ 村野 正景	中国東南地方周代における地方型青銅鼎の生成と展開に関する研究
ラカンオーラーン パトゥンポン	1980年代以降におけるタイ経済の変貌と1997年のパーツ通貨危機
リュウ ギョウレイ 劉 曉玲	「1950年代における旧財閥系大手炭鉱の経営について ー三井鉱山を事例としてー」
リュウ ジェン 劉 鍵	中国語母語話者を対象とする専門日本語教育用の教材開発についての基礎研究 ー理系学習者のための素材と作業ー
ワタナベ タイスケ 渡邊 太祐	新見荘の復元的研究
ワダ マリ 和田 真理	家庭系生ごみの資源循環利用に関する研究

国際社会文化専攻

氏名	博士論文題目
カンバラ 神原 ゆうこ	民族の自己認識にみる国民国家概念の有効性 ーチェコスロヴァキアの分離を事例としてー
オー ヒャンソン 呉 香善	朝鮮植民地下における在朝日本人に対する朝鮮語教育の総合的考察
キン シュンヒ 金 春姫	1920年代の間島における朝鮮人教育について ー東興中学校の事例からー
クワン オミョン 權 五明	郭沫若の歴史劇『屈原』の研究
クワカ ワタル 日下 涉	民主化以降のマニラにおける貧困層の政治 ースラムからみたもう一つのフィリピン政治ー
クラシゲ タクヤ 倉重 卓也	高橋悠治のアジア論
コガ タカシ 古賀 喬史	1960年代以降のメキシコにおけるペンテコスタリズムの拡大 ー実践宗教として捉えた改宗の論理ー
シハラ タカノ 篠原 隆徳	ジェームズの宗教思想
ジョ ラクセン 徐 楽千	冷戦後における中国の台湾政策
センダ カナ 千田 加菜	合成角閃石の結晶化学と赤外OH伸縮振動バンド
タケダ シュンコ 武田 順子	ヘルダーの詩『天地創造 朝の歌』と『人類に対する神の御心と行為』 における人間観
テラノ ナオコ 寺園 直子	九州大学全学教育におけるEFLプログラム分析 ー「接続的」「継続的」「国際的」な大学英語教育を目指してー
ナカノ ミカ 中野 美香	教育ディベートにおけるパラメンタリー・ディベートの位置付け ー異文化間教育としての教育的意義ー
ハヤシ タツヤ 林 辰弥	珪藻化石群集の分析による古カトマンズ湖の第四紀環境変動の研究
ハラサキ トオル 原崎 徹	「現代英米語における 'mandative subjunctive'」
パールイシエフ エドワード	第一次世界大戦期における日露接近の背景ー社会史的考察
ヒライ ヨシオ 平井 義郎	開発の捉え方ーネパールの開発問題を通してー
マツダ リュウジ 松田 隆治	日本語を母語とする大学生による議論的文章のマクロ構造 ー日英語のライティング教育における文章構成と転移の問題をめぐってー
マンブク マミ 萬福 真美	タイ人学習者向け初級聴解教材開発のための基礎研究
ムクンダ ポーデル	Study on the depositional environment in the southern part of the Kathmandu Basin, Central Nepal
ヤン スア 楊 素娥	〈日本〉としての台湾における台湾議会設置請願運動 ー蔡培火の論理を中心にー
ヨシダ エイタロウ 吉田 栄太郎	ヴェイトゲンシュタイン『論理哲学論考』の「ソリプシズム」をめぐるー考察